

日本印度学仏教学会第五十九回学術大会 パネル発表 「現代人の「いのち」と仏教」報告

〈はじめに〉

日本印度学仏教学会第五十九回学術大会が二〇〇八年九月五日(木)、六日(金)に愛知学院大学で開催された。今回の学術大会では、一般の個人研究発表とは別に五つのパネル発表が企画され、九月六日の午後二時三〇分から午後五時まで実施された。主催校の本学では木村文輝がコーディネーターとなり、他大学の先生方の協力を仰ぎながら、第四パネル「現代人の「いのち」と仏教」を行った。このパネルにおける発表者と発表題目は下記の通りである。

- 一、リビング・ウィルの射程
——自己決定権の「自己」とは誰か——
木村文輝(愛知学院大学准教授)
- 二、縁起思想の生命倫理学
鍋島直樹(龍谷大学教授)
- 三、デザイナーベイビーは王舎城の夢を見るか
——生殖をめぐる倫理と仏教——
前川健一(東洋哲学研究所研究員)
- 四、スピリチュアルケアの臨床から見えてくる諸問題
谷山洋三(四天王寺大学准教授)
- 五、各発表者に対するコメント
大野栄人(愛知学院大学教授)

日本印度学仏教学会第五十九回学術大会パネル発表「現代人の「いのち」と仏教」報告

日本印度学仏教学会第五十九回学術大会パネル発表「現代人の「いのち」と仏教」報告

本報告では、このパネルの全容を記録として残すため、企画の趣旨を記した後に、四人の発表者が当日の発表内容を踏まえて執筆した論文を掲載する。その上で、当日のパネル発表会場における大野栄人氏によるコメントと、約五

十分に及んだ質疑応答の全文を採録する。なお、当日の会場で質問を寄せられたのは、斎藤明氏（東京大学大学院教授）、井上ウィマラ氏（高野山大学准教授）、紅椽英顕氏（相愛大学教授）、中島小乃美氏（奈良県立医科大学講師）の四氏である。質問をお寄せ下さった四人の先生方、ならびに、当日ご参集くださった学会員の諸先生方に感謝申し上げます。

〈趣旨説明〉

一九八〇年代に、わが国では臓器移植医療の実施の是非をめぐる国民的な議論が繰り広げられた。そうした中で、日本印度学仏教学会ではこの問題を仏教学的観点から検討するべく、一九八八年（昭和六十三年）七月に北海道大学で開催された第三十九回学術大会総会において「臓器移植問題検討委員会」の設置が決議された。委員長には愛知学

院大学教授の前田惠學氏（現在、愛知学院大学名誉教授）が就任し、事務局が愛知学院大学に置かれた。また、その事務は大野栄人氏によって担当された。

同委員会では、一九九〇年（平成二年）六月に東北大学で開催された第四十一回学術大会において「脳死・臓器移植問題および生命倫理」をテーマとするシンポジウムを行い、同年九月に臓器移植問題に関する「委員会見解」を取りまとめた。その詳細は前田惠學氏による「委員長覚書」とともに、『印度学仏教学研究』第三十九巻一号（一九九〇）にまとめられている。

その後、日本印度学仏教学会では一九九一年（平成三年）七月に仏教大学で開催された第四十二回学術大会において改めて「生命倫理委員会」を設置し、再び前田惠學氏を委員長に選任した。この委員会は、一九九三年（平成五年）に高野山大学で開催された第四十四回学術大会において「仏教と生命倫理——生命操作・脳死移植問題・ターミナルケア——」をテーマとするシンポジウムを行い、その主要な活動を終了した。同委員会の活動報告は『印度学仏教学研究』第四十二巻一号（一九九三）に掲載されている。

さて、今回愛知学院大学で開催された日本印度学仏教学会第五十九回学術大会は、同学会において「臓器移植問題検討委員会」が設置されてから二十年目に相当する。また、かつて同委員会の事務局が愛知学院大学に置かれていた縁もあり、今回のパネル発表を企画した次第である。

この二十年の間に、わが国では「いのち」をめぐる様々な問題が提起された。一九九七年（平成九年）にいわゆる「臓器移植法」が制定され、今日に至るまで、同法にもとづく七十六例の脳死移植が実施されている（二〇〇八年十一月末日現在）。さらに、一方では「いのち」の誕生に関わるクローンやES細胞、代理母等の問題が提起され、他方では「いのち」の終焉に関わる介護と看取り、安楽死等の問題が次々に持ち上がっている。

けれども、こうした「いのち」の問題に対して、仏教研究者の側からのアプローチは、臓器移植問題ほどには盛り上がっていないのが実情である。とは言え、その必要性が失われたわけでは決してない。むしろ、これからも「いのち」の問題に対する仏教的考察は、ますます求められていくであろう。ただし、その手法が二十年前と同じでよいと

は思われぬ。現在は、当時の反省を踏まえながら、仏教的考察の新しい方向性を模索すべき時機に來ているのではなからうか。例えば、特定の宗派の見解に偏ることや、経典や論書の細かい字句の解釈に拘泥すること、あるいは、臓器移植や安楽死という個々の問題の是非の判定のみに終始することは控えるべきであろう。

このような視点にもとづいて、本パネルでは人間の「いのち」の問題に関して、他者との関係性に注目しつつ、仏教の立場から総合的に論ずるための基本的立脚点を構築することを目的とした。最初に発表した木村は、「いのち」の問題を個人の問題に矮小化すべきではないことを述べ、その理論的支柱の提示と具体的な事例の検討を他の三人の発表者に委ねた。鍋島氏は、「いのち」があらゆる生物と非生物との相互依存の中で存在することを縁起の視点から論じ、仏教的生命倫理の方向性を提示した。前川氏は、「いのち」の誕生に関わる諸問題を、「子供がほしい」という欲望そのものを批判的に見つめる仏教本来の視点から問い直した。最後に谷山氏は、終末期医療をはじめ、様々な臨床の場におけるスピリチュアルケアの問題点を指摘し、

日本印度学仏教学会第五十九回学術大会パネル発表「現代人の「いのち」と仏教」報告

それに対する解決の可能性を仏教者の立場から考察した。
各発表の詳細については、それぞれの発表者による以下の
論文を参照されたい。

(文責 〓 木村文輝)